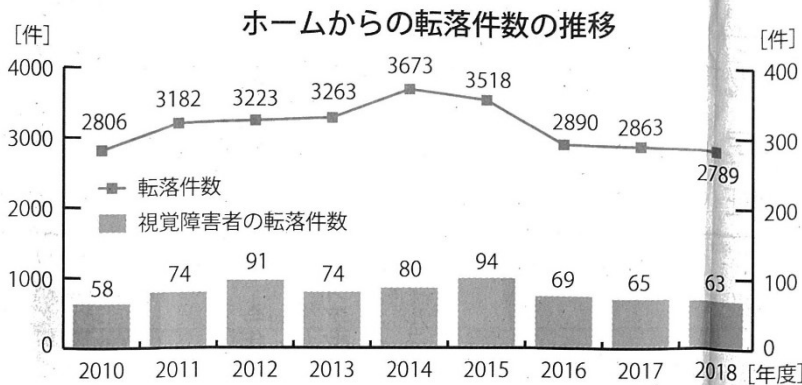


日視連

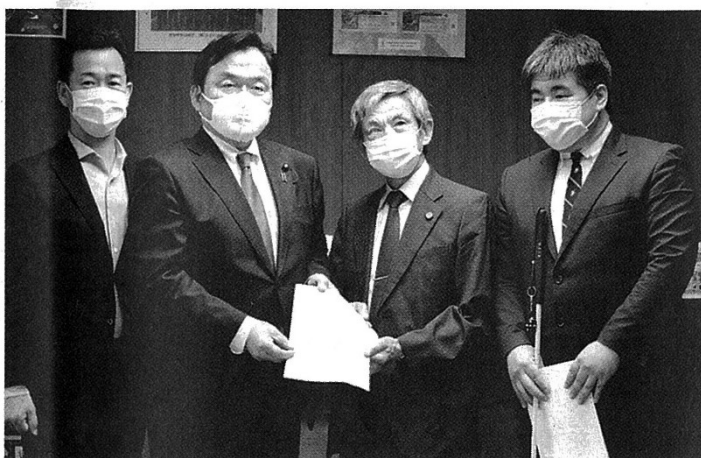
ホームドア整備で要望

国交相 「10万人未満の駅も」



(注) 転落者数は鉄道事業者が把握している、プラットホームから転落したが列車等と接触しなかった件数。自殺は含まれない

出典：国交省「駅ホームからの転落に関する状況（2019年度）」



赤羽大臣に要望書を手渡した竹下会長(右から2人目)

日本視覚障害者団体連合(日視連・竹下義樹会長)は9月23日、羽一嘉・国土交通大臣に要望した。国交省は

これまで1日の利用客数が10万人超の駅を中心に整備してきたが、赤羽大臣は「今後は10万人未満の駅でも必要な所に整備する」と回答した。

また、これまでは駅単位で整備してきたが、今後は番線単位で危険性を判断する考えも表明。10月上旬にも駅ホームでの視覚障害者の安全対策を検討する場を設けるとした。

国交省によると、駅ホームからの転落事故は10年度以降、毎年約2800〜3600件で推移。このうち視覚障害者は58〜94件あった。

ホームドアは20年度までに800駅に整備する目標だったが、今年3月末時点で整備済みは855駅。08年度の2倍に増え、目標を上回っている。

国交省が新たに立ち上げる検討会では、視覚障害者がホームの端に接近した場合にセンサーやカメラで検知し、危険であることを本人と駅員に知らせる方策を議論し、21年3月末までに結論を出す。

国交省によると、視覚障害者がホームの端に接近した場合にセンサーやカメラで検知し、危険であることを本人と駅員に知らせる方策を議論し、21年3月末までに結論を出す。

視覚障害者が駅ホームから転落死する事故は今年、都内のJR日暮里駅と阿佐ヶ谷駅で発生。いずれも事故現場にはホームドアがなかった。事態を重くみた日視連は2016年9月以来4年ぶりに国交省にホームドア設置を要望した。

(福田敏克)